

鬼師の世界
——白地：鬼英——

高原 隆
Takashi Takahara

愛知大学国際コミュニケーション学部

Abstract

The series of "The World of Ogre-Tile Makers" finally arrived at a turning point. I had dealt with "Kuroji" as fired tiles for a long time. I think I could succeed in depicting the world of ogre-tile makers. However, they were the stories of tiles fired in kilns. When I visited to interview Atsushi Yamashita who was an excellent ogre-tile maker among young generations, he gave me a comment on my fieldwork: "Won't you do a fieldwork about Shiraji's people? I know a very good artisan whose name is Onihide."

The new page of my fieldwork began by Yamashita's saying. The article is about the story of Onihide. Probably he is one of the newest ogre-tile makers. I had pursued traditional ogre-tile makers. However, their current generations do not remember their origins well. On the other hand as Onihide is a new ogre-tile maker, he himself is the founder. So this article is a story about the birth of an ogre-tile maker.

いよいよ『鬼師の世界』は「黒地」から「白地（しらじ）」へと移る。高浜では鬼板屋が自ら窯を持ち、粘土の荒地から鬼瓦を形成して銀色に焼き上げるまでを一貫して行うところを「黒の鬼板屋」といい、三州鬼瓦製造組合に彼らはだいたい加入して活動している。ところが全ての鬼板屋が必ず焼成するための窯を持っているかといえば「否」となる。鬼瓦を粘土から作るのだが、一番最後の工程に当たる焼成をせずに他の鬼板屋ないしは瓦屋へ商品として出荷する鬼板屋が存在する。粘土は文字通り粘り気のある水分を十分に含んだ土で、昔はそれぞれの鬼板屋が粘土を採取し、独自にいろいろな性質の土を混ぜ合わせて粘土を作っていたが、現在では鬼板屋とは別の粘土専門の会社を作る配合粘土を鬼板屋の大半は購入している。鬼板屋は土状の粘土を荒地という厚さ3センチほどの板状に荒地出し機で作り、そこから身に付けた技を駆使して様々な鬼瓦を作っていく。「鬼」が荒地という粘土の板から作られるので、それを作る人々を「鬼板師」という。粘土は水分を含み、ほぼ自在に鬼板師が形を整えることが可能である。この段階での粘土の色はやや茶色がかかった鶯色である。その時の光線の加減で茶色っぽく見えたり、緑がかかって見えたりする。ところが水分は次第に蒸発していき、粘土は徐々に白くなっていく。水分が十分に抜けきると、白色になり粘りは消え、手で加工する事は出来なくなるほど硬くなる。鬼板師はこの粘土の水加減を調整しながら仕上げていくことになる。この粘土から水が抜けて鬼瓦の形になったものを「白地」と呼んでいる。鬼瓦としては半製品であるが、白くなった鬼瓦を作る人々を「白地屋」と呼ぶ。事実、白地屋の人々が加入している組合が「黒地」を作る人々と同じように存在している。三州鬼瓦白地製造組合がそれである。このように「鬼板屋」は大きく「黒」と「白」の二グループに三州では分かれている。ただ囲碁の石のようにはっきりと「黒」と「白」に分離しているわけではない。どちらかというとおセロゲームに実態に近い。おセロゲームは一つのコマが黒と白の二面を持ち合わせており、その場の力関係によって「黒」か「白」かが決まる。鬼板屋の「黒」と「白」も似たところがあり、いくつかの鬼板屋が三州鬼瓦製造組合「黒」と三州鬼瓦白地製造組合「白」の二つに加入して活動しているのは事実である。

さてここでは「白地」の鬼板屋の中で手作りを専門に鬼瓦を作っている人々を取り上げ、彼らの生き様を描いてみたい。調査は黒地の鬼板屋と白地の鬼板屋をほぼ同時に進めていった。直接の理由は前述のようなおセロゲーム的な状況が「鬼師の世界」の実態であったからである。しかし、いざ彼らの世界を描く段階においては意図的に二者を分けた。そのほうが第三者が見たときにそこにある伝統文化が何か分かりやすくなると思ったからであった。「文化を書く」上でもやはり便宜上書きやすく、そのための補助線を導入したことになる。

鬼英へは2010年3月5日に訪れた。もともと頭の中にあった鬼板屋ではなかった。山下鬼瓦の山下敦をたずねてしばらくインタビューをしていた時、山下敦本人が「鬼英さん

はいいですよ。やってみられたらどうっすか」と話を持ちかけられたのが始まりである。そして山下さんと話をするたびに鬼英のことが話題に出るので、山下さんがそれほど認める人ならばということで継続してフィールドワークをすることに決めたのである。本来なら黒地の調査研究を完成した時点でいったん区切りを入れ、テーマは「黒地の鬼瓦」にして一つにまとめようと計画していたのだ。しかし、山下さんと話しているうちに考えが変わり白地でも手作りの名手がいるという指摘を受け、白地の手作りをも加えてフィールドを広げるほうが鬼板師のオセロゲームの実態により近くなるかと考えたのがきっかけであった。おまけに話をする山下敦本人が黒地組合に所属しながら現在は実質白地屋をしているというオセロゲーム的存在だったので説得力があった。さらにその先の純白地屋への移行はある意味自然の流れのようなところがあったといえる。

鬼英

鬼英こと春日英^{ひでき}紀とは初めて今年（2010年）3月5日に出会った。それから以後は再度、製作風景を写真に撮りに行ったり、山下鬼瓦や鬼十でもたびたび顔を合わすようになっていった。このことは逆にいうと鬼英と山下鬼瓦と鬼十は仕事を通じてとても付き合いが深く、そういった環境の中へ私が紛れ込んだ形になった事を意味する。最もはじめて鬼英に会ったと書いたが、実際はすでにずっと前に会っていたのである。昔、福井製陶所へ福井謙一を訪ねていった時（平成12年1月26日）、謙一のすぐそばで鬼瓦を黙々と作っていた若い職人がいた。謙一は一言、「娘婿だんね」といったのを覚えている。（第1図および第2図参照）その時の職人が「鬼英」を興し独立した鬼板師になっていたのである。つま



第1図 鬼瓦を製作中の福井謙一



第2図 福井製陶時代の春日英紀

り新しい鬼板屋の誕生が起きた事になり、奇しくもその鬼板屋の母体になった鬼板屋を偶然にもすでに調査していたのである。山下敦から「鬼英」と何度もいわれてもしばらくの間ピンと来なかったのはその新しさゆえであり、ここに新しい鬼板屋「鬼英」の誕生譚を書くことにする。

山下鬼瓦の工場へ春日英紀にまず来てもらい、バイクで車を先導してもらって目的の鬼英に行った。来た事のある道だったので変だなと思いつつ走っていると、何と鬼長の社長の本宅がある屋敷のすぐ隣を鬼長から借りて鬼英の工場としていた。もともと鬼長の手作り職人が使っていた建物だという。私は福井製陶所かその周辺でやっているのかと思っていたのがあっさりはずされ、なるほどこれは本当の意味での独立だなと思った。実際に独立したのは平成19年9月1日の事である。鬼英こと春日英紀は昭和39年1月20日に碧南で生まれている。父親の春日義明は鉄工所でサラリーマンとして職工をしていた。昔でいう鍛冶屋である。一時独立して鉄工所を経営していたが、主たる取引先の会社が倒産して経営が行き詰まり北新川にあった別の鉄工所へ勤めるようになったのである。また母親の美恵子は家が名鉄碧南駅に近かったので駅の駐輪所の管理の仕事をしていた。春日の今の職に繋がるものは見当たらない。ただ一つ、母方の祖父は群馬県で大工の棟梁をして弟子も多く抱えていたという。それを聞いたときこれはまるで瓦と無縁でもないなと思った。つまり父方、母方とも技術を身に付けて生活する家系となり、春日は両家系から何らかの技術的素養を受け継いでいる事になる。事実、小さい頃からものづくりが好きだったと春日は話してくれた。

物を作るっていうのは好きだったかもしれない。例えばあんまり絵を描いたりだとか、

そういうのは苦手だったんすけど。字を…習字だとか。

あのう…、まあ良くある、例えば、段ボール箱だとか、その辺にあるような廃材を持ってきて、あのう…飛行機の形を作ってみたりだとか。

で、ただ飛行機を作るだけではなくて、実際乗ってみたくて、柱にロープをこうつけてブランコみたいにしてやってみたりとか。そういうなんか遊びはようやりましたね。

うん。けど、まあ、といいながらも通知表の図工はいつも、多分「2」とか…。

春日は小学校の思い出に引っ掛けて面白い話をしてくれた。第4回飾り瓦コンクール作品展が高浜市のかわら美術館であり、春日の出品していた作品を小学校のときに世話になった先生が見て、わざわざ鬼英の工場をたずねて来てくれたのである。

たまたま裏に作業にいとって、ここ（工場）開けっ放しで。で、ものの十分ぐらいたって戻ってきたら、ここ（テーブル）になんかポンってものが置いてあるんですよ。

あれ、なんだろう。あれ、誰か来たんだろうかって思ったら、あのう、名刺の裏書に、あのう、「たずねてきました」ぐらいなこと書いてあって。名刺を見たら、うんっ…これもしかして小学校…小学校3年、4年生のときの担任の先生で…。

わざわざたずねて来ていただいて。

で、すぐ電話して。ほいで…「いきなりどうしたんすか」っていう話をしたら、あのう、「飾り瓦コンクールの」、あのう、「君の作品の名前、プレートを見て春日英紀っていうのはわしの教え子だなあ」って覚えていただいてたんですよ。

ちょっと感激しましたね。

小学校の先生はどれほどの数の生徒を30年近くにわたって教える事になるのか分からないが、名前を覚えていてしかもたずねていくことはそれほど数ある事ではない。春日英紀は成績は当時、パツとしなかったかも知れないが、何かがあったと思わざるを得ない。私自身が現在学生に教えている立場にあるだけに尚更のこと春日の話の中で印象に残ってい

る。

春日英紀を鬼師の世界へ導く事になった出来事は中学校を卒業してから付き合い始めた彼女との間に16歳になって子供ができたことが発端であった。その彼女の名前が福井優子であった。

16歳で出来ちゃったんですよ。で、気がついた時には、まあ、今の嫁さんなんですけど…。

もう、かなり、もう、あのう、たとえば、…あのう、中絶だとかできんぐらいの近くまで、もう、…日にちがたっちゃって。

で、まあ、自分的にも、いい加減な気持ちでつきあっとったわけじゃないし、よし、じゃ、このまま行っちゃうかって。

で、しこたま…両方の両親からしかられて、「どうするだ」って話で。「逃げちゃうか」なんて話もしとったんですけど。逃げたところでそんななんどうにもならへんし…。

で、まあ、こっちの嫁はんの、あれですよ、福井謙一ですよ。えらいようしてもらって。もう、家財道具から、ええ、もう、アパートまで全部手配してくれて。ほんで、「とにかく。まあ、お前、なんも持って来んでいいで、とにかく、お前…」、「うちの娘、まあ、大事にしてくれ」っていうふうで。

僕がひょろひょろって行って、すぐそのアパートに入って、もうその日から生活が出来るような、あのう、…状態にしといてもらって。

まあ、ほいでも、あれですよ。感謝せないかんですね。

このようにして春日英紀は福井謙一の娘と巡り会い、何と結婚を16歳で執り行い、それが縁で鬼板屋の門をくぐっている。しかも、ただ生活の面倒を見てもらっただけではなかった。福井謙一は春日英紀に生活の糧を得る手段までも提供したのであった。自らの意志で鬼板屋の門をくぐったわけではなく、全くの運命に導かれるように鬼板屋の世界へ入っているのが特徴である。

そこへ来て、仕事まで教えてもらっちゃって。あの時、もう、あのう、自分の周りで遊んどった友達がみんな言うんですよ。

「お前、あのときに子供が出来てなかったら、どっちの方向に行っとったと思う」だとか、そういう話になって。こりゃ、まあ、ろくな人生送ってなかった。(大笑い)

不思議な縁である。16歳で付き合っていた女性に子供を作るというと一般的な通念からするとかなりの不良かなと思うかもしれない。しかし、春日英紀は意外なほど真面目な人物であった。まず、子供が出来て逃げ出したいところを踏ん張って責任をとったところからしてその性格がわかるが、それは家族に対してだけでなく仕事においてもかわらなかった。

だで、あのう、16で親父（福井謙一）に使ってもらって、福井製陶時代も、どうっすか…休みをもらっているのは、もうほとんどの風邪引いちゃって、一年に一回ぐらい。どうにも、足腰も熱でかくかくになっちゃって、立てんようなときは休ませてもらったことあるんですけど。それ以外はほとんど休んだ事なかったすね。

今はちょっといかんすけどね。逆に自分で立ち上げ、やるようになってちやうと自由が利きすぎて。

やる時にはもうある程度夜なべしてでも…。お客さんの納期が一番じゃないですか。で、もう、ターってやって、で、ちょっと余裕が出来ちやうと、あのう、だらけるんですよね、やっぱり。

結果、春日英紀は福井謙一の娘との出会いを機に「鬼師の世界」に入ったことになる。しかも鬼板師になるには理想的な中学卒業の16歳であった。このタイミングは意図して行われたわけではないのは明らかであり、事実、春日はしばらく鬼師の世界に入りつつもその事に気づかなかった。

いやもう最初は漠然と、とにかく真面目に働いて、で、親父に給料もらって。で、子供食わしていかにゃいかんという事で、意外と何も考えずにやっとなところがあるんですよ。

つまり、福井製陶所に入り、福井謙一のもとで仕事をするようになった春日英紀がやって

いたのは鬼瓦のプレスをする仕事であった。ただひたすら真面目に鬼瓦のプレスを毎日していたのである。ところがそうした毎日の春日に転機が訪れる。

二十歳ちょっと過ぎたころに、周りの子たちが、いろいろな役職だとか、自分で商売立ち上げて、結構、そのう、稼ぐようになったりだとか…。そういう話を聞くようになったときに、ああ、自分もこのままずっとなあなあで、そのう、まあ、プレスの仕事が誰でもやれるっっちゃうわけじゃないですけど、まあ、例えば、一年、二年、こうやるとれば、それなりの形になるような…じゃ。「つまらんな」って思ってますね。

で、片や親父（福井謙一）はお寺のなんかえらいむずかしそうな鬼を作ったりだとか…。

そういうのを見て、最初は全く興味なかったんですけど、かなり大きいもんになると、一人でもずり上げられんじゃないですか。ほうすると、呼ばれて、「ちょっと一緒に運んでくれー」って。

で、そんなのをやってるうちに、「ああ、自分もちょっとこういうものを一回作ってみたいな」っていう気になったんですよ。

で、親父に頼んだところ、最初は、あのう…親父も結構頑固者だったもんすから。「そんな、お前、甘いもんじゃないんで、まだ早えー」っぐらいに言われたんすよ。

その時、春日は22歳であった。当時はひたすら金型を使ってプレスで鬼瓦を起していたのである。福井製陶に入って7年目の出来事であった。自分の前にある宝に全く気がつかなかった春日が長い眠りから目を覚ました瞬間であった。異なる世界が見え始めたのである。同じ時間と同じ空間にそれは存在していた。福井が春日に仕事の世話はすぐにしたが、鬼板師の道へと奨めなかったのには理由があった。福井には息子がいたのである。ところがその息子が鬼板師に興味を示さなかったことが春日の仕事ぶりと並行的にあったことが大きな要因としてある。反対に期待していない娘婿の春日が遅まきながら、息子と似た環境の中から自ら意思表示をしたのである。

ええ、福井製陶にも、親父の実の息子がおったんですけど、その時、やっぱりプレスの方の方に先に入らして。

ここにも春日には何か鬼板師へ導かれる力が働いていたように思われる。福井謙一は本心

としては実の息子に「鬼板師になってほしい」と願っていた事は間違いない。しかし、同時にその道の厳しさも十分に知り尽くしていたので、やる気を示さない息子よりも興味を自ら示す娘婿の春日を選んだのであった。

で、親父に頼んで、最初は「まあ無理だろう」ってことは言われとったんすけど。まあ、「じゃあ、一回やってみるか」ってことで。

で、両方やりながら。例えば、午前中プレスのほうやって、昼から、「じゃ、こっち来てやれ」ってことで。

それをやるとるうちに面白くなっていっちゃったんすよね。そのう、やっぱ、物作りってというのが。

で、コツコツ…「馬鹿だ、戯^{たわ}けだ」言われながら、教えてもらったような事はあるんすけど…。

鬼英の原点がここに語られている。春日英紀よりもはるかに恵まれた環境で育った福井謙一の実の息子が鬼板師になる事に興味を示さないところに、娘婿の春日が興味を示し、嫌がるどころか面白くなっていったのである。春日自身の素質が適した土壌に移ったことにより今やと芽を出し始めたのであった。

まず謙一のもとで始めたのは何と「踏鞴^{たたら}踏み」からであった。

僕、いまだに踏鞴やとるんすけど。で、山下君によく言われるんすよ。「今時、こんな事やとるひとおらんよ」って。「ある意味、伝統のあれで残してほしいなあ」とか言って。冗談半分というか、言われるんすけど。

しかもこのように鬼英となった現在も踏鞴を踏み続けているのである。春日の生真面目さが良く現れていると思う。初心を忘れずで、よほど謙一に初めて教えてもらったときの感動が強かったのではないかと想像する。鬼英は踏鞴を踏むたびにその時のモードに心がスィッチするのかもしれない。それが全ての始まりであった。

踏鞴踏み…ただ単純に下に地板を敷いて、で、まあ、うちそこに土鍊機があるんすけど。半真空ってちょっと固めの粘土があるんすよ。それを買ってきて、まあ、土鍊機



第3図 「踏鞴踏み」をする春日英紀

に放り込んで、まあ、水加減は適当に上からじょうろで水をチョロチョロ入れて。で、まあ、下から出てきた硬さを見て、使いやすい硬さにして、それを、塊を、その下に敷いてある地板に叩きつけて、ある程度の高さになったら、毛布を敷いて、ひたすら乗って、足でグニュグニュふんずけて。で、はみ出た分は、まあ、そのう、針金っすか。あれで、スパッと切って、また盛って。それをもうひたすら繰り返して、繰り返してやる。最終的には側面を綺麗にして、駒ですよ。積み木みたいな。駒を積んで、で、もうあと、横にダーっとスライスしてくって感じ。いまだにやっ取るんすよ。逆に、もう、使いやすいんすよね。(第3図および第4図参照)

春日は機械で荒地を作る荒地出し機についても同時に言及している。

「何で使わんの」って言うんですけど、逆に…あのおう、やっぱり何ていうんですかね、あれ。まあ、荒地出し機の機械も無いはないんですけど、話きいとると、何か、こう、あれも一枚ずつ出てきたやつを積んで保管して、それを使ってほしいんですけど。踏鞴の場合だったら、もう自分の好きな幅がいつでも取れるじゃないですか。で、



第4図 「踏鞴踏み」した粘土の固まりを
スライスする春日英紀・優子

まあ、場所も食わんし。

踏鞴の土だとたまに^{きず}瑕が出る事があるという。どういう時にしやすいかという、やはり踏鞴を踏めないほど忙しい時だという。

けっこう、あの、仕事が忙しくなってくると、踏鞴もふんどれんような時間のもったいなさの時があるんすよ。ほうすと、「ちょっと代わりにやって」とか。ほうすと、なれない人が踏むと、中に空洞が出来ちゃうんすよね。踏み切ってないもんですから。ほうすと、そういう粘土使って、製品を作ったって時はやっぱり締まっていなもんすから、^{きず}瑕が出たりだとか…。

で、良いものを作るときは必ず自分で気の済むまで踏んづけてやって。ま、今回はいいだろうっていう時は、プレスの子たちをちょっと呼んで、「ちょっと作って」と言ってる。そんな風でやってましたね。

瑕が出るか出ないかの粘土の違いは感覚でわかるものだと春日はいう。

そのう、何ていうんすか、もう、触った感じも若干違いますよね。よく締まってるのと、締まってないのと。もう明らかに素人さんがまあ見てもわかると思うんですけど。空洞が、もう、スライスして、こうやってめくって毎に、空洞がポンポンあるよう

な踏鞴だと、まあ、あんまり良いもん出来んでしょね。

今でもありますよ。ちょっと急いどって、あんまり念入りに踏んでないと。自分が踏んだやつでも、空洞がポンポン空いて。嫁はんが使っとって、「踏鞴ちょっと良くないよ」とか。(笑い)

親方の謙一と一緒にのときは次のような様子で踏鞴を作っていた。

踏鞴、基本的に高さでいったら、まあ、どうでしょうか。まあ、当時、高くつんどったんすけど、50センチとか。

一つの踏鞴を作って、それをもう自分で全部使い切るんですよ。型を持ってきて、で、無くなると、また自分で。とにかく「自分で使う分は自分でやれ」という。

ええ、で、親父が使う分は、まあ、当然のことながら僕が。「ちょっと、踏鞴がなくなったで、やっつけ」という話。もう、ひたすらやりましたよ。

このことは伝統が福井製陶の謙一から鬼英の春日へと連綿と受け継がれている事を物語っている。そして、事実、「使いやすい」と春日は何度もいうのであった。

踏鞴を身に付けた春日は次に石膏型を起す作業へ進んだという。その様子を春日は語ってくれた。

最初は、そのう、型、石膏型を起しっぱなしで、もう、形にしたものを、バリの一杯つい取るやつを、親父に任して。で、親父がやってくれとったんすけど。

つまり、春日が言っているように石膏型に粘土を入れて、ただ形になったものにして起すだけをやっていたのである。

そうなんですよ。ひたすら起すばかりで。

で、次の段階で、「水なで」っていうのがありませんか。ある程度表面を、あのう…水をつけて。磨く一歩手前の段階なんですけど。それを教えてもらって。

で、それが（水なで）そこそこやれるようになった時点で、じゃあ、次は、まあ、仕上げですか。…ていう段階ですね。

「踏躰」、「型起し」、「水なで」、「本仕上げ」の順に仕事を覚えていったことになる。ただ職人によっては機械で荒地を作り、「型起し」をして、「水なで」を省き、いきなり「本仕上げ」に入る職人もいるという。石膏型を使って一人で仕上げる事が出来るようになると、いよいよ手作りの鬼瓦へと進むことになる。

で、一通り石膏型に関するものが合格もらえるようになってから、あのう、一品もんと言いましょか…。紙っぺら一枚の図面から、粘土を切りつけて、顔を立ち上げて、裏表張って…。

で、あとは、まあ、雲だったら模様は粘土で付け土して。っていう風に順番に教えてもらったすけどね。

事実、ほぼ二人三脚のような形で親方から弟子へ技術が継承されていったことがわかる。実際、福井謙一にインタビューに行った時、福井製陶所の入り口から入って工場内に向かってすぐ右手の窓際のところが手作りの作業場となっており、窓の手前に作業台が長く横に窓に沿ってしつらえてあり、二人は並んで、窓に向かって右側が福井謙一、左側が春日英紀であった。二人は共に作業用の紺色の土にまみれた前掛けをして、無言で作業をしていた。流れる音はラジオの声と、すぐ後ろの工場からプレス音がガチャガチャと響いていた。

春日は石膏型から型起しをマスターするのにほぼ一年かかったという。すでに6、7年近くプレスをやってきており、その時、へらで面取りをして仕上げる工程まではすでに手掛けていたのである。その分何も経験無しでいきなりゼロから始めた者と比べて格段に早かった事になる。

石膏で起して、形にして、水なでして、磨いて。時間はかかりましたけどね。

親父もやっぱり最初は、「いっくら時間がかかってもいいで、とにかく自分の気のすむまで」、あのう、「磨いてみて」、で、「俺に見せろ」ってことで。

で、納得したものを親父に持って行ってって、「どうか…」。

「あかん」つつって。(笑い)

そりゃあ、もう、ひたすら言われましたね。一番、あのう、うるさく言われたのは、あの、磨きよりも、雲の芯ってあるじゃないですか。一番最初の始まりの。雲の芯の、そのう、何ていうんすかね。へらの入れ方というか。あれは、もう、えらいうるさく言われましたね。

ええ、あとは、面取りもそうなんすけど、うちの親父の口癖としては、まあ、「鬼は、鬼瓦は、まあ、面で生きるだ」とか。まあ、「面の取り方一つで生きるだ」とか。あと、「雲の芯一つでかなり変わるだ」とか。そういうことはかなり厳しくいわれたんすけど。

寡黙な感じがする福井謙一が仕事に関してはかなり鋭く弟子の春日に対して語っていた事になる。聞きながら驚きと共に畏敬をとまなう感動さえも覚えたほどである。福井は「見て覚える」をやはり小僧時代、修業先の「福光」の鬼板屋で実行していたのであるが、立場が変わった謙一は弟子に対し、「見て覚える」だけでなく、要所要所に的確な指導をしていたことが良く分かる。この違いはやはり春日英紀が単なる職人ではなく、身内で自分の文字通りの後継者だとはっきり認識していたからであろう。

一方、独立して鬼英となった春日英紀は教えを請う親方がいなくなってしまった今、親方の存在のありがたさを語ってやまない。技の継承はこうした「ありがたさ」をとまなう尊敬とその自省にあるようである。

いまだに迷うんですよ。ほんと、ほんと。「あれ、これでええのかな」とか。

で、一番参考になるのは、あのう、親父が残してってくれた石膏がまだいまだに、まあ、当然あるもんすから。それを、あのう、注文が入ったときに、久々に、ああ、これは親父の型だなあと思いながら型起しをして、磨くじゃないすか。そうすつとやっぱり、やっぱりスゲェんだなっていう…のはありますね。

で、今、全く同じものを自分で、親父の作ったものとまねして作ってみろといわれても、多分…似たようなものは出来ると思うんすけど、あそこまではなかなか行けないすね。

春日の話を知っていると、いかに親方であり親父である福井と一心同体であるかがヒシヒ

シと伝わってくる。二人が互いに媒体となって、鬼瓦の伝統を、身体技法を、鬼の美を、共振させ合っているのである。春日が最初に型起しの合格が出たときの話をしているが、やはり、師弟が鬼を介して共振している様が伝わってくる。

合格…まあ、ええ、「まっこんなもんか」という。「絶対よし」、「これは上手に出来た」というのはその段階で言ってもらえなかったですね。

「ま、とりあえずこれならお客さんに出せるで、まあ、良しにしとくか」って事。

といっても、必ず親父の…手が必ず入るんすよ。どっかどっかで。例えば、雲の芯を直されたりだとか、ちょっと面のとり方を直されたりだとか。で、そこで初めて親父が、「よし、まあ、こんなもんか」って。で、「完成、持ってけ」って言われましたね。

手作りの鬼瓦の修業に入ったときも型起しのときと似た段階を踏んでいる。石膏型から起すときはただひたすら型から起す作業をやったことに相通じる作業を春日はしている。

手張りで作る鬼にしても、最初はもう、付け土、雲…を付けていく事も、当然やらしてもらえんですから。

もう、ひたすら土台作り。裏…ああ、表から側^{がわ}を立ち上げて、裏を張って。大まかな形だけ作って、親父に流して。

それに親父が付け土をして、仕上げるっていう感じでしたね。

で、それもある程度のときが来たときに、「付け土をやってみるか」って話で。で、それも、まった、それ難しくて…。

側を張ったりするのはえらい褒められたんすよ。こればっかは褒められたんすよ。「お前、手が早くてなかなかいいぞ」って。「これだけ早く、」そのう、「土台の箱が、形が作れるなら、こりゃ、いいわ」ぐらいの。それは褒められたんすよ。

で、付け土の段階になったときに、「あ、これは、お前、モノにならんな」ぐらい。(笑い)

「当分かかるぞ」って言われて。

でも、まあ、自分的にも、まあ、悔しかったもんすから、一生懸命がんばったすね。これもやっぱり、これでいいだろうと思って、親父を呼んで見てもらおうと、「あかんがな」。

で、意外と、そのう、ここはこういう風にして、こういう風にとか、へらの入れ方だとか、そういうことは教えてくれなかったんですよ。

やっぱり、もう、「見て覚えろ」ぐらいのこと。

だで、そのカワ磨きの、あのう、石膏型の仕上げのときでも、結局、親父の作った原型の、あのう、原型で、へらを当てとる感覚っていうのがあるじゃないですか。それを、あのう、チャンとこう覚えて。ある程度によそ事…よそ見しとってでも、できるようにならにゃあかんわなってことで。

ここからもわかるように、春日は仕事場が文字通りの修業の場であり、福井から直伝の形で、厳しく仕込まれた事が見えるのである。一種の英才教育に近く、他の鬼板屋でしばしば聞かれされた「見て覚える」一辺倒のやり方は福井は取っていない。「見て覚える」は基本だが、要所要所をしっかりと押さえて、必要なところは見逃さず、言葉に出して教えていたのである。さらに、目の前で完成品にするための最後の手直しをもしていた。このことは修業中の鬼板師にとって得る物は計り知れないものがある。

土台作りから付け土が手作りで出来るようになると、手作りの鬼瓦は一通りの工程が完了した事になる。春日に、「で、その次はあるのですか」と聞いてみた。すると、返ってきた答えが、「生き物」であった。これは他の鬼板屋でも良く耳にした言葉である。この範疇に入ってくるのが、立体的な形をした、植物、動物、人、そして鬼などが挙げられる。一方、普通の鬼瓦というのが、「鬼」の姿をぜんぜん持たない、カエズ、並鬼、影盛、経ノ巻といったものになってくる。後者を基準にしてなぜ前者のグループを「生き物」というかといえば、中心となる形が「生きた」ものを指しているからである。つまり両グループの関心は生きている証としての「生命感」、「躍動感」となる。単純に言う「動き」が要求され、次元の違う世界となるのだ。

春日はこれまでの修業の流れを見てもわかるように、基本が型起こしから始めているので、「生き物」に要求される「動き」を表現する事が苦手というか、まだ未知の領域なの

である。事実、師である福井は「生き物」の指導はしていない。これが福井なき現在、春日が向き合う次なる目標である事は明らかであろう。

生き物って言うのは、苦手だったもんすから、尚更、そういうものを作っていかなかったもんで、尚更できんすよね。

で、僕も今だにそうなんですけど、やってみるといいかなとは思って、結局、いつまでたっても形にならんもんすから、つつい…。そのう、あのう、よそへ出しちゃったりだとかしちゃうんですけど。

僕の場合、ほとんど恥ずかしい話しながら、鬼瓦は、まあ何とか、何とか形になるんすけども、ただ…そのう、生き物っていう話になってくるとあれですよ。 「ごめんなさい」って感じですよ。

この春日の言葉からもわかるように、鬼瓦の修業には大きく二段階あり、一般的な鬼瓦をマスターしたら鬼板師として独立できる。しかし、すぐに次の山が^{そび}聳えており、それが「生き物」の世界なのである。そしていわゆる鬼の姿をした鬼面瓦はこの第二の山に存在する。また春日は師匠の福井が常日頃手掛けていた経ノ巻、影盛などをお寺用に主に作り、一般用の住宅に載せる並鬼などを石膏型で量産して技を身に付けてきたのであった。つまり福井製陶時代、春日は第一の山の中で修業していた事になる。

春日に師の福井謙一から教わった事は何だと思うかと聞いてみた。

あのう、「真面目に、地道に、コツコツ」という、うーん、ことが、まあ、サラッと云っちゃうとその一言ですよ。

隣同士で、あのう、仕事をさせてもらって、何ていうんすかね、まあ、よく似た、そういう、何ていうの、気質というか、そういうのもあったかも知らんすね。

意外と自分、自分が自分で言うのも変なんすけど、けっこう、真面目にやるとこはやるっちゃうところもあって。

まあ、親父は、まあ、ひたすら、日曜日も仕事やる人だったんすよ。趣味は全然なさそうで、ただ、その、うーん、仕事終えてからの酒飲み、酒を飲む事と、そ

れぐらいの楽しみしかなかったんじゃないですかね。

まあ、長い時間、それこそ、朝から晩まで、同じ時間で、隣同士で、まあ、ほんとに会話っ中会話は無かったすけど。

ただ、まあ、親父の姿を見とって、あれですよ。あのう、ひたすら、まあ、コツコツ真面目にやっておれば何とかなるのかなっていう、そんな事は感じつつ、隣で仕事やってましたけど。

春日は黙々と鬼瓦を朝から晩まで作り続ける福井の姿をいつも見ながら、同じように、やはり黙々と鬼瓦を作り続けてきたのであった。そして福井製陶はプレス部門が同時に存在しており、同じ工場内で、お袋、親父、春日、娘（嫁）、妹、弟と職人が一人といったいわゆる家内工業体制で鬼瓦を生産していた。ところが転機が福井製陶にやってくる。阪神淡路大震災（1995年）以降、どんどん一般住宅の和瓦の需要が減り続け、不況が重なり、工場を操業すればするほど赤字になっていく事態になっていったのである。結果、2006年に福井製陶所をたたむ事にしたのであった。

とにかく、兄弟、身内というか、兄弟集まって、「もう、たたもうぜ」っていう話をして。で、それを親父に納得させにゃいかんじゃないすか。

で、親父のところに話を持ってきたときも、「頼むで続けてくれ」って言ったんです。

まあ、親父がそれこそ生きとるうちは、何とかやってやりてえやって気持ちもあったんですけど。まあ、それは、何とか説得して、で、まあ、手作り部といいましょうか、屋号を変える形になっちゃうけども、自分が引き継いで、あのう、やってくでっていうふうで、それで親父も承知してくれたんじゃないのかな。

この時、二代続いてきた福井製陶は事実上閉鎖した。しかし、福井製陶所は内部に新しい生命を宿していた。その福井製陶所が培ってきた伝統のバトンを託された人物が春日英紀だった。春日は鬼板屋の慣習にもとづいて屋号を「鬼英」とし、独立したのである。福井謙一は福井製陶所から鬼英への移行を見届けたことになる。ある意味、福井は自身の技が継承されていったことを確認できて、本望だったと思われる。鬼英は確かに2006年に誕生した新しい鬼板屋であるが、福井謙一の父、福井真二から始まり、さらには、真二が職

人として働いていた長坂末吉の鬼末へと繋がるある意味、三代の伝統をもつ鬼板屋であるともいえる。

謙一は鬼英が始まってしばらくは働きに来たという。

当初、こっち、僕が移った時、内職程度にはここの作業場でやっとたんですよ。獅子だとか、何ていうんですか、軽い小さい製品で、いすに座ってでも出来るような。

あもう、一年ぐらいはなんやかんやで、手伝いに来てくれとったんですよ。

謙一はその翌年に入院し、二年前（2008年）の夏に亡くなっている。まさに世代交代と共に鬼英が生まれたといえよう。ただ、謙一はこの世を去って行ってしまったが、大切な伝統という名の遺産を春日に残していった。春日の身体にそれは身体知として今も生きた伝統として息づいている。しかし、それだけではなく、数多くの石膏型も残していったのである。春日は二つの点をあげて謙一の石膏型に助けられているという。

今までにちょっと複雑な図面が来て形にしてみた時に、果たして、この、何ていうんですか、雲の形状でいいのか。高さだとか。

あくまで紙っぺら一枚の、何ていうんすか、平面図じゃないですか。それを立体的にもってくには、それはやっぱ、経験だとか、技術だとか。ま、基本はある程度あるかも知れんすけど。ほいじゃ、気に入ってもらえるような鬼を作ろうって思った時にはどうなんだろうかという…。(第5図参照)

この平面から立体への移行のヒントとして謙一の石膏型がとても役に立つという。

どうにもわからん時には、あもう、大きさは別になるんすけど、形は基本的に一緒じゃないですか。それを引っ張り出してきて、生（なま）土を込んでみて、起してみても、で、「あっ、こういう風にやるんだなあ」って。

もう一つのケースが発注を受けたのと同じ石膏型が見つかったときだという。

たまにお客さんから発注もらったとき、「あっ、この鬼ってほいじゃあ、石膏型がどっかにあったなあ」って。で、ちょっと探しに行った時にあった時にはメチャ



第5図 「二尺寸経ノ巻吹流」を製作中の春日英紀

メチャ嬉しいもんすよね。

で、もう、使い終わった後は必ず、所定の位置に戻すんですけど、ただポンって置いて来るんじゃなくて、必ず手を合わせて、「親父、ありがとう」ぐらいの、本当にそういうことはやりますよ。

それは本心で自分の気持ちから、自然とこういうふうに合わせて、石膏型プラス親父に対して、「ありがとうございました」、「助かりました」。

ところがなんとこの手を合わせて石膏型と謙一に感謝する儀式は実は春日が初めて行い始めた事ではなかったのである。春日によると、謙一も実はやっていたという。そしてそれをしているところを見た事があるというのだ。

(見たことが) あります。ていうのは、親父は自分で作った石膏型に対してそういう事をしとったんですよ。

やっぱり、向こうの職場（福井製陶所）も二階があったじゃないですか。で、基本的には、そのう、二階に石膏型は保管してあって。で、台車に使い終えた石膏型を載せて引いて行って、親父が上いって。まあ、上いったのは知っとるんすけど。

僕も違う用事で、たまたま二階に上がって行って、ああ、親父、型、片付けとるなあっていうふうに、普通に見ながらフッと行った時に、拜んどったんすよ。

「おっ、親父、仏さんに何拜んどんのかな」って、そんな時は半分、馬鹿にしたような。馬鹿にはしなかったですけど。「何か年寄りくせえことやっとるな」ぐらいの。思っちゃったんすけど。

この不思議な符合は教えられたものではない。鬼瓦の製造にたずさわる者だけが体感的にわかる石膏型のありがたさへの自然な表現なのであろう。春日はダメ押しのように付け加えた。

うちの嫁さんもほいだで言うんすよね。さすがに手だけは合わせないですけど。あのう、間に合った時は、型が。「良かったね」って僕に言うんですよ。「謙一の作とった型が残ってって良かったね」って。

春日の謙一に対する師弟間の繋がりは謙一亡きあと尚更強まっている感がある。

去年（2009年）の、うん、去年の夏に、やっぱ、そういうことあった時に、えらい助けられたんすよ。その石膏型があったことに対して。で、あん時は缶ビール買って、すぐそこに墓があるんすけど、墓石の上から缶ビールをぶっちゃけて、はい。お礼を、お礼ていうんすか、感謝の気持ちを表してきた事もあったっすね。（第6図参照）



第6図 尺二寸蛇ノ目経ノ巻荒目足付
愛知県東海市 玉応寺 龍雲院
春日英紀作

まとめ

2005年に新しい鬼板屋が高浜に生まれた。鬼英という。山下鬼瓦をフィールドワークしている時に、山下敦からその存在を知らされた。山下敦があまりにも熱を入れて鬼英を褒めるので、本来なら山下鬼瓦でとりあえず完了させる予定の「鬼師の世界」をさらに拡張する発端になったのが、この鬼英であった。しかし、実際に鬼英を立ち上げた春日英紀に会っていろいろと話を聞かせてもらうようになって、「鬼板屋の誕生譚」として最適のケースだと考えるようになった。三州の鬼板屋はほとんどが三代目ないし四代目となっており、その意味は、初代に関しては伝聞の形でしか伝わっておらず、ある意味、神話のような話になってしまい、限りなく霧がかかったように霞んでしまっているのが実態である。そういったところへ現われたのが、「鬼英」だった。しかも、もともとは福井製陶所の福井謙一の直弟子であり、娘婿である。さらに幸いな事に謙一が存命中に、謙一に私自身が会ってインタビューをしていたのである。これは何か面白いものになるといった予感のようなものがあつた。結果、形となって現われてきたのは、一鬼板屋の「死」であり、一鬼板屋の「生」であった。そして見えてきたのが、築き上げてきた鬼板の伝統がまるで生きているかのように一つの鬼板屋から別の鬼板屋へと転生をする様だったのである。

本文中でも指摘したように、鬼英はこれまでの伝統にのっとった鬼瓦を継承発展させていくのか、それとも、新しい「生き物」の領域へと鬼瓦のバリエーションを広げていくの

かは今のところ定かではない。まだ鬼英はある意味生まれたばかりである。しかし、先代の謙一は去り、今、春日は最も親しくしている鬼板屋の一つがこの調査の発端になった山下鬼瓦である。その山下敦が得意とする鬼の一つが「生き物」である事からして、春日英紀のとり道が今後、どのようになるのかが楽しみともいえる。長く調査を継続していると対象となる人々や物事が流転する様がありありと見えるようになってきたこの頃である。

参考文献

- 石田高子 1983年 『甞のうた』 愛知県陶器瓦組合
 駒井綱之助 1963年 『粘土瓦読本』 彰国社
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
 杉浦茂春編 1962年 『高浜市資料(六)』 高浜市
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年 『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』 高浜市伝統文化伝承推進実行委員会
 高原 隆 2002年 「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247
 —— 2003年 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189
 —— 2003年 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132
 —— 2004年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号：113-165
 —— 2004年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175
 —— 2005年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号：97-111
 —— 2005年 「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208
 —— 2006年 「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116
 —— 2007年 「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-